



発表会日程決まる

— 踊りは最後は自分の表現 —

ないと、なかなかそういう機会もないですし、そこから又、潜在しているものが呼びさまされたりリズムや音楽、作品全体の理解も深まったりしますので。

— 一度、寿玉さんの舞台のお手伝いさせてもらったのですが、中に着るチョゴリやペチコートまで全部丁寧にアイロクンがけをされているんですよ。韓国舞踊のこだわりを目の当たりにしました。

寿玉— そういう細かいところにまで配慮して、袖を通し、立ち、体中の細胞全てのアンテナを研ぎすましておく。そうすると感じることに、見えてくるものが違ってきます。何度もそうすることを繰り返していく、と言うことだと思っております。それは私自信も師匠の舞台のお手伝いをしながら学ばせて頂きました。それと、あともう一つ、踊る嬉しさと、楽しさが増せばなあ、と思っております。

— 最後に、発表会に来てくださるお客さんに一言お願いします。

寿玉— お客様たちの力をぜひお借りしたいと思っております。それは出演者と同じ空気を感じていただいて、見守っていただくことだと思っております。

聞き手… 西方恭子

— 来年の5月24日にチュムパンの会の発表会が決まったそうですね。会が発足しておよそ十年になりますが、今回が初めての発表会です。

趙寿玉— 毎年、年末に「おさらい会」を行なってきました。生徒同士が見守る中、その年に練習してきたことを一人で踊り、節目としていたのです。その内、友人や身内の方々も見に来て下さるようになりました。これは十二年間続いてきたのですが、お客様のなかから「そろそろ舞台の上での発表会をやったらどうか」という声が三年前くらいからチラホラでてきたのです。その後、生徒たちのなかで提案されたのが動機です。

— 一般的にはこういった習い事の教室では先生が主導になつて発表会をやりまますよ

ね。生徒さんのなかから自然にそういう気持ちが出てきた、というのは興味深い話です。

寿玉— すぐに、そういう話でたわけではないのです。生徒のなかにはプロ経験者もいますが、ほとんどが素人です。から「そこまでは」といった雰囲気だったのです。趙富子さんの還暦を祝った舞台「華齡」を経験して、少しずつ、恐る恐る、生徒たち自ら発表会をやってみようか、という気持ちになつたようです。

— そういう生徒さんたちの想いが舞台にうまく表れるといいですね。

寿玉— ええ。私たちの教室には、長年踊ってきた人は殆ど居なくて、年配になつて始めた人もいます。その個性や良さもそれぞれなんです。そういうものがうまくにじみ出てきて、そしてそれが素敵に表現されるような舞台にできればなあって、思っています。

韓国舞踊の発表会では韓国からゲストをお呼びしてやることが多いんです。実際、日本で韓国舞踊なんかできる訳がないと言う人もいます。でも踊りは最後は自分の表現だと思ふんです。

— 生徒さん達の励みになりそうですね。

寿玉— 励みと言えば励みですが、人前で踊るといふのは、大変なことですよ。

— よく観客が舞台を育てるとか言いますよね。

寿玉— 上手な人もそうでない人も、全員出てもらうつもりです。出ること自体は、まあ、何とかできるのですけれども、やはり出るからには、そこを一つ越えてもらいたいと…。

— なるほど。

寿玉— 私の生徒さんたちは年齢層も高いですし、皆さん大人です。だから、その踊りの経験値は少なくとも、人生の経験（智）を生かして頂き、

余裕や味わい深さ、と言ったものが出せれば、と。でもそこまでにするには、生徒一人ひとりが、自分と踊りに真摯に向かい合わなければならぬんです。

— それにしても、人間の生き様がにじみでるような踊りといのは本当に難しそうですね。

寿玉— そうですよ。もう練習中に私は「鬼」になるしかないですね（笑）。

でも生徒たちも頑固なんですよ。悔しくて涙が出て練習し続ける人もいます。家庭や仕事があるなかで練習の時間を作るというのはいへんだと思ひます。見ていて切なくなる時もあります。でも、いくら練習がきつなくても続けたい上達できる、とわかつているから、くらいいついてくる。

あとは、発表会で、髪も整えて、チョゴリを綺麗にまとい、ピニョを凛と挿した、韓国舞踊のきちんとしたたずまいを経験してほしいという思いもあります。こういう事でも

余裕や味わい深さ、と言ったものが出せれば、と。でもそこまでにするには、生徒一人ひとりが、自分と踊りに真摯に向かい合わなければならぬんです。

— それにしても、人間の生き様がにじみでるような踊りといのは本当に難しそうですね。

寿玉— そうですよ。もう練習中に私は「鬼」になるしかないですね（笑）。

でも生徒たちも頑固なんですよ。悔しくて涙が出て練習し続ける人もいます。家庭や仕事があるなかで練習の時間を作るというのはいへんだと思ひます。見ていて切なくなる時もあります。でも、いくら練習がきつなくても続けたい上達できる、とわかつているから、くらいいついてくる。

あとは、発表会で、髪も整えて、チョゴリを綺麗にまとい、ピニョを凛と挿した、韓国舞踊のきちんとしたたずまいを経験してほしいという思いもあります。こういう事でも

余裕や味わい深さ、と言ったものが出せれば、と。でもそこまでにするには、生徒一人ひとりが、自分と踊りに真摯に向かい合わなければならぬんです。

— それにしても、人間の生き様がにじみでるような踊りといのは本当に難しそうですね。

寿玉— そうですよ。もう練習中に私は「鬼」になるしかないですね（笑）。

でも生徒たちも頑固なんですよ。悔しくて涙が出て練習し続ける人もいます。家庭や仕事があるなかで練習の時間を作るというのはいへんだと思ひます。見ていて切なくなる時もあります。でも、いくら練習がきつなくても続けたい上達できる、とわかつているから、くらいいついてくる。

あとは、発表会で、髪も整えて、チョゴリを綺麗にまとい、ピニョを凛と挿した、韓国舞踊のきちんとしたたずまいを経験してほしいという思いもあります。こういう事でも

善光寺奉納舞

10月14日、長野県善光寺の再建三百年祭の一環として、趙寿玉先生による「僧舞」の奉納が行われた。「僧舞」奉納を立案した三百年祭の企画チームのチーフである若麻績眞海（敬史）住職に話を聞いた。

——善光寺再建三百年祭について教えてください。

善光寺の本堂は、1707年に火事で焼けてしまったのですが、現在の本堂はそのとき再建したもののなのです。東日本では1番、日本でも3番目に大きな規模です。本堂は当時のお布施で再建されました。つまり多くの人々の「心」によって再建されたのです。そういった意味で再建三百年祭は善光寺にとって、とても大切な催し物でした。

日本最古の仏像だと言われている善光寺の御本尊の一光三尊阿彌陀如来様は、インドから朝鮮半島百済へと渡り、仏教伝来の折りに日本へ伝えられました。642年に百済の聖明王から献呈されたものとされています。

三百年祭では仏様がよるこ

んでいただける企画をしなればと考え、インドと朝鮮半島の音楽や舞を奉納する三国伝来祭を計画しました。数年にわたって実現のために尽力しました。

——そうしているうちに、趙寿玉先生の僧舞をご覧になる機会があったのですか。

初めて観たときに、「まさにこれだ！」と膝を打ちました。最初からストライクでしたね。

専門家ではないので評論はちよつとはばかられるのですが、私は寿玉さんの踊りの独特の「間」に惹かれました。言うならば木造のヨットの帆が大きな風を受けたときの瞬間のような「間」です。

——当日の奉納された舞をご覧になっていかがでしたか？

嬉しくて嬉しくてしようがない、という感じでした。やっとう願いが叶ったと。

お客様も400人というこれまでの奉納のなかでも最も多くの方々に集まっていたお客様の心と寿玉さんの踊りが合体して本堂のなかの空気は一つになりました。この空気

はきちんと仏様に届いたと思います。

——僧舞は朝鮮時代に布教に使われたものが、舞台芸能として発展したと聞いています。日本の仏教にも布教に唱や舞を使うことはあるのでしょうか。

宗教では布教に唱や踊りを使うことが多くあります。また唄や舞は神と人間がつながる回路でもあります。

日本で有名なものは神道の雅楽がありますね。トルコには男性がスカートのような衣装をつけて、クルクル回る教団があります。日本の仏教で



僧舞

仏教的な色彩の濃い独舞で、韓国舞踊特有の「静中動」「動中静」の精神が表現されている。1969年韓国重要無形文化財第27号に指定された。

いうと、鎌倉時代の僧侶である一遍さんが踊り念仏というものをを行ったのですが、これは今でも残っています。あとは盆踊りですね。これは人々がご先祖様に「私たちは元気ですよ」といったメッセージを送る意味もあります。

こういった唄や舞は、どうすれば、神や仏に通じるのか、またどうすれば信仰の心の人々に通じるのだろうか、熟考重ねた上の表現なのです。念仏に抑揚をつけて唱のように唱えるのもそういった意味合いがあるのです。

——三百年祭では盆踊りもなさったそうですね。

2日間で約5万人が集まりました。「お盆縁日」との名を付け、40数年ぶりの復活を果たしたとともに、親子連れで楽しめる屋台を揃えたり、盆踊りが始まるの若者たちが踊りの輪に加わりやすい雰囲気作りを努めました。その結果、たくさんの方々的心から楽しんでくださった「お盆縁日」であったでしょうとの想いがあります。

——チュムパンで踊りを学ぶ生徒たちにメッセージをお願いします。



善光寺徳行坊住職。和合海・大乘和合海 代表。

伝統というのは「古くさいもの」として敬遠されがちです。しかし伝統こそ未来性があるものなのです。もしその伝統が1500年続いてきたものならば、今後1500年続く可能性があるので。過去と現在をつないで力があるので。それから、未来もつなげるのです。そして、未来へとつないでくれるのは物事の「本質」です。韓国の伝統舞踊の世界に入って、習い続けようと決めたい人は、本質的なものに近づけるチャンスをつかんだという事です。本質的なものに近づけたり、身につけたりできるということは素晴らしいことです。苦しみを乗り越えて現在にまでいたる人々の心や、人間の遺伝子の偉大さに気がついていくうえで、大きな土台になると思います。

決してたやすい道ではないでしょうが、趙寿玉先生に続いて今後も踊りの修練を積むためにがんばってください。

聞き手..金香清

「花弦草」「灌頂」そして「奉納舞（僧舞）」

くわんぢやう

柏木 美奈

この秋は幾つもの印象的な公演があった。

一つは、9月29、30日の二日間、上野の応挙館で行われた公演「花弦草」。

国立博物館の庭園内にある応挙館は、1742年に建てられ、後にこの地に移築されたという趣のある茶室だ。

寿玉先生はまず、椿座の語りにあわせてゆつくりと、まるで舞踊を封じ込めたかのように、ただゆつくりと濡れ縁を歩いた。

暗い室内から見ると、滴るような庭の緑を背景に、ゆるやかに踏み出す一瞬一瞬が鮮やかな一枚の絵画だった。

競演の舞踏家、鈴木一琥氏の舞。平野真敏氏の奏でるヴィオラ・アルタ。友吉鶴心氏の薩摩琵琶。相手によって先生の舞は、前衛的にも、逆に原始的にも思えたりしたが、芯に伝統の形があるから少しもブレがない。

続く10月21日に行われた椿座とのコラボレーション、代々木能楽堂での公演「灌頂」でも、

そのことを強く感じた。

演目のベースは平家物語の「大原御幸」。生きながら死の国にいる哀しい女の物語だ。

まず花摘みから戻った女御の姿で「序」を舞い、業を思わせる重厚な衣装を纏って、直面のような表情で「破」を舞う。そして清冽な白いチマチヨゴリ姿で、苦悩する魂を救済する「急」。

能の形式を踏襲しながらも、感じたのはやはり韓国舞踊の力だ。

「必ずやこの迷える魂を救ってあげる」、そんな強くしなやかな気概が、ただ虚無の中に留まるだけの能の世界を一步も二歩も超えてゆく。

鼓の盧慶順さんとの息詰まるような掛け合いも素晴らしかった。

そして10月14日には長野の善光寺で奉納舞が行われた。国宝、善光寺の本堂に入ると、厳肅さと慈愛の両方に包まれた。この場所は御仏との対話の場なのだ。

参拝を妨げないために音を出せる時間が限られ、充分なリハーサルはできなかったそう。それでも数百人もの人が静かに見守る中、厳かに奉納の舞は始まった。

はじめに御住職と来賓のご挨拶があり、李明姫先生の唄、朴根鐘、李東信両氏の演奏が続く。

澄んだ柔らかな音曲が、ひんやりと薄暗い堂内を静かに浄め続けると、次第に、穏やかなのに空気が濃くなるようになった。そこへ先生がスツと現れた瞬間、フワツと心が開放されたような気がした。

あとはただ、集ってきた無数の魂と先生が舞で語りあう様を静かに目撃していた。

昇っていく魂を引き留めるようにも、迷い惑う魂を捕まえて放つてやるようにも思える動きで、とにかく全身全霊を込めて何度も空間を白く撫でる。

そのとき先生は、とても落ち着いていて、そして本当に

強い人に思えた。

先生のお手伝いをしたオン二には、金粉が降るのが見えたそう。私にはただ、あの場に立ち合えた全ての人が、本当に深く何かを感じているのがわかっただけだ。

きつと伝統というものは、すでに出来上がってしまった古いものではなく、聖火リレーのように、いま手にしている人はひたすら懸命に走って、次の誰かに手渡さなければならぬにちがいない。そのように長い間受け継がれてきたものが、たった一人でどんなに頑張ったものより強いのは当然だろう。

常に伝統を大切にすること



「灌頂」 撮影：鈴木健一郎



「花弦草」 撮影：横川寛

と、未知の表現に挑み続けること、寿玉先生のなさっていることは本当は一つなのかもしれない。実り多い豊かな秋だった。

歳々年々人同じからず

康 明心

師走を目の前に控え、今年一年を振り返る。今年もまた良い年だったと、恵まれた縁に感謝を感じるのが、趙寿玉先生の舞踊教室との出会いだ。

ポソンを履いたこともなかった私が今ではそれを履き、伝統舞踊を踊る。いつか自分にも来るハルモニの時代のため、そして自分なりの表現を持ちたいため、と思い憧れていた舞踊の世界に触れている。

歳を重ねこうなりたいという理想のハルモニ像がある。オツケチュムを素敵に踊るハルモニ。それは、幼い頃、お花見や結婚式で気持ち良く踊るハルモニ、ハラボジの姿を見ていたためであろう。ハ



ルモニたちは踊りを習ったから踊れるのではない。歌が始まりチャンゴの音が鳴り響き、そのチャンダンを聞くだけで身体が自然と動くのだ。私もチャンダンを聞くと血は踊る。しかし、それに合わせて味のあるオツケチュムを踊ることは残念ながら出来ない。自分なりの表現を持ちたい。そう強く感じたのは、3年前のフランス留学がきっかけだった。日本で生まれ育った在日コリアンの私の存在は、周りから理解を得るのがなかなか難しかった。出生地主義を取るフランスでは、その国で生まれた者はその国の者という考え方。しかし、私は日本

本で生まれはしたが、コリアンとして生きてきている。その自分の意識と周りの理解のギャップから、自分に分かってもらうには言葉を通しての話し合いも重要だ

が、目で見て耳で聞きその空気を感じられる歌や踊りなど芸術での表現方法を持つことも大切なのではない、今までも何もしてこなかった自身身を恥じ、悔いた。そして、日本に戻ったら必ずムヨンに習おうと心に決めた。

友人の「舞踊を習っている」というふとした言葉で見学に訪れた幡ヶ谷の教室。

長い綺麗なチマが動くたびに風をはらみ、チマの裾からは白いポソンのぞく。そしてチャンダン。初めは見学だけ、という気持ちだが、チャンダンを聞いた途端自分もそのチャンダンに乗りたくうずうずしているということに、なんとも云えない気持ち良さを感じた。

まだ基礎もまったくなくない。「明心が踊っているのは韓国舞踊じゃない」と度々ソンセンニムからお言葉を頂く。その言葉は心に痛い、ふとした時におっしゃる「オルシグ！」の言葉にまたまた励まされる。そういうソンセンニムやオンニ方のいらっしゃる教室に出会えたこの縁に心から感謝している。いつか本当のムヨンを踊れるように。そして、理想のハルモニになるために、これからも一つ一つを大切に踊っていききたい。

◎活動報告

◎ 2007年9月7日(金)

大阪柳会 宋和映先生追悼公演に出演 エル大阪にて
演目 サルブリ舞

◎ 2007年9月20日(木)

神戸慶光寺 お彼岸の法要
演目 僧舞 サルブリ舞 立舞

◎ 2007年9月29日(土) 30(日)

「art・link上野谷中2007」
「舞台にわくわく」に出演 国立博物館敷地内応挙館にて
演目 創作舞踊

◎ 2007年10月14日(日)

善光寺本堂再建三百年祭 僧舞を奉納

長野国際親善クラブ主催 韓国舞踊公演に出演

ホテル国際21にて
演目 舞鼓 チャンゴチュム プチェチュム 五方舞

◎ 2007年10月21日(日)

「灌頂」代々木能舞台(敷き舞台)にて
演目 創作舞踊

◎今後の予定

◎ 2007年12月4日(火)

アジア芸術祭に出演 韓国 国立国楽院 大ホールにて
演目 中国琵琶の演奏に合わせて創作舞踊

◎ 2007年12月15日(土)

ビック東海CATV事業部 新社屋竣工記念
謝恩イベントに出演
ブケ東海 ブライトンホールにて

◎ 2008年1月27日(日)

「青柳会 第29回定期公演」に出演
韓国 晋州 慶南文化芸術会館にて

◎ 2008年5月24日(土)

チュムパンの会舞踊発表会